

ハインリヒ・ハイネの織工詩(1)  
 ——時事詩『貧しき織工』と『シュレージェン  
 の織工』についての若干の予備的説明——<sup>1)</sup>

大久保 進

DIE SCHLESISCHEN WEBER.<sup>2)</sup>

シュレージェンの織工<sup>3)</sup>

Im düstern Auge keine Thräne,  
 Sie sitzen am Webstuhl und fletschen die Zähne:  
 Deutschland, wir weben Dein Leichentuch,  
 Wir weben hinein den dreifachen Fluch —  
 Wir weben, wir weben!

くらい<sup>またこ</sup>眼に 涙もみせず  
 機<sup>はた</sup>にすわって 歯をくいしばる  
 「ドイツよ おまえの<sup>きようかたづら</sup>経轛子を織ってやる  
<sup>みえ</sup>三重の呪い<sup>のろ</sup>いを織り込んで  
 織ってやる 織ってやる

Ein Fluch dem Gotte, zu dem wir gebeten  
 In Winterskälte und Hungersnöthen;  
 Wir haben vergebens gehofft und geharrt,  
 Er hat uns geäfft und gefoppt und genarrt —  
 Wir weben, wir weben!

ひとつの呪いは 神にやる  
 寒さと飢えにおののいて<sup>すが</sup>縫ったのに  
 たのめど待てど 無慈悲にも  
 さんざからかい なぶりものにしやがった  
 織ってやる 織ってやる

Ein Fluch dem König, dem König der Reichen,  
 Den unser Elend nicht konnte erweichen,  
 Der den letzten Groschen von uns erpreßt,  
 Und uns wie Hunde erschießen läßt —  
 Wir weben, wir weben!

ひとつの呪いは 金持どもの王にやる  
 おれたちの不幸に目もくれず  
 残りの錢までしぼり取り  
 犬ころのように 射<sup>う</sup>ち殺しやがる  
 織ってやる 織ってやる

Ein Fluch dem falschen Vaterlande,  
 Wo nur gedeihen Schmach und Schande,  
 Wo jede Blume früh geknickt,  
 Wo Fäulniß und Moder den Wurm erquickt —  
 Wir weben, wir weben!

ひとつの呪いは 偽りの祖国にやる  
 はびこるものは 汚辱<sup>はつとく</sup>と冒<sup>けつ</sup>瀆ばかり  
 花という花は すぐ崩れ  
 腐敗のなかに 蛆<sup>うじ</sup>がうごめく  
 織ってやる 織ってやる

Das Schiffchen fliegt, der Webstuhl kracht,  
 Wir weben emsig Tag und Nacht —  
 Altdeutschland, wir weben Dein Leichentuch,

箴<sup>は</sup>はとび 機台<sup>はた</sup>はうなる  
 夜も日もやすまず 織りに織る  
 古いドイツよ おまえの<sup>きようかたづら</sup>経轛子を織ってやる

Wir weben hinein den dreifachen Fluch,  
Wir weben, wir weben!

三重の呪いを織り込んで  
織ってやる 織ってやる」

### 1.

特に詩作品の翻訳は、最終的には原テキストにひとつの解釈を与えることであり、またそれが解釈であるがゆえに、前提としてか結論としてか評価を与えることでもある——とするならば、テキストが時事的なもので、一定の政治的・社会的立場に立っていたり、あるいは政治批判・社会批判的な意向を有していたりする場合には、この事情はその分だけ増幅されざるをえまい。

ところでハイネの時事詩『シュレージエンの織工』(初稿『貧しき織工』)について論ずる場合、この詩の成立のきっかけとなったとされる<sup>4)</sup>、1844年初夏のシュレージエンにおける織工たちの蜂起<sup>5)</sup>を、そしてこの蜂起の解釈と評価をめぐる〈ハイネとマルクス〉問題を避けて通るわけにはいかない。それは、一般に時事詩 Zeitgedicht が、詩人の生きかつ詩作する現代としての〈時代 Zeit〉の人物や出来事や問題を詩の対象として選択するものであり、したがって〈時代〉とのアクチュアルな関係こそ時事詩の強みであり、かえってまた弱みとなる<sup>6)</sup>——という理論的前提からしてばかりではなく、事実として、ハイネの織工詩成立以降すでに140年を経過した現代の、しかも日本において、この詩のよって立つ〈時代〉もこの詩のアクチュアリティももはや自明ではないからであり、〈時代〉を詩の対象として選択した1844年のハイネを規定している条件の中で、マルクスとの親密な関係が大きな意味をもっていたことが確実に推測されている<sup>7)</sup>からであり、〈ハイネとマルクス〉もまた織工詩の〈時代〉のいわば一部をなしているからである。

木庭宏によれば、日本の「戦後の〔ハイネ〕研究が情熱を傾けて取り組んだ重大テーマの一つ」こそ、この「ハイネとマルクスとの関係」だった<sup>8)</sup>。例えば「学問的なハイネ研究を通じ、彼にまつわる多くの謬見・偏見を除去し、彼を日本に紹介した嚆矢の人」<sup>9)</sup>舟本重信はその大著『詩人ハイネ・生活と作品』<sup>10)</sup>の中で、そして「ハイネ研究のいわば大御所」<sup>11)</sup>井上正蔵はその論文『ハイネとマルクス——「貧しき織工」をめぐる——』<sup>12)</sup>で、この問題を論じている。調査・議論に精粗の差はあれ、いずれもハイネの仕事とマルクスのそれとを内容的かつ年代的に比較検討し、とくにマルクスとの交友時代に成立した(とされる)『貧しき織工』(乃至後の『シュレージエンの織工』)を中心にすえ、それを(井上は)フライリヒラートの長詩『シュレージエンの山間より』およびその続篇の未定稿と、また(舟木・井上とも)マルクスおよびアルノルト・ルーゲによる織工の蜂起についての論評と対比することによって、ほぼ同一の結論に達している。紙数の都合でここでは「舟木よりは一步研究を押し進めた井上正蔵」<sup>13)</sup>の論文のみをとりあげる。

井上は、1843年12月末に始まったと推定されているマルクスとの交友以前にすでにハイネは「社会傾向詩人」<sup>14)</sup>、「社会詩人」になっていたが、「直接マルクスを知りマルクスによって触発され」て、「……明確にたたかう敵の目標がきまり、『貧しき織工』などのようにプロレタリアの立場にはっきり立って社会の変革を志向する社会主義的詩人の本領」を「発揮できた」と結論し<sup>15)</sup>、

『貧しき織工』の「制作の過程で、マルクスから思想的影響を受けたと解することは、けっして不可能ではない」<sup>167</sup>と主張する。そしてこの詩の内容は、織工の蜂起についての「マルクスの革命的見解にひとしいといわねばならない」<sup>177</sup>・「小市民的なルーゲの立場とはまったく反対の革命的なマルクスの見解は、このハイネの詩においても脈々と生動している」<sup>187</sup>と強調する。そしてさらに、同じくマルクスとの交友時代につくられた『ドイツ・冬物語』(44年1月原形成立)におけるハイネの詩行との関連で、「従来のハイネの作品には見られなかった社会主義的理想」<sup>197</sup>・「明らかに社会主義、というより共産主義的思想」<sup>207</sup>を云々し、この長篇叙事詩が「どのようにマルクスの影響をうけてつくられたものであるか」と問い、「マルクスが『ヘーゲル法哲学批判・序説』の結論として述べている言葉が、いわばハイネによって確認され表現されているとってさしつかえない」と断言する<sup>217</sup>。

しかしここで例えば「社会主義的詩人」・「社会主義的理想」・「共産主義的思想」などの語によって意味されているものは、論述の中で必ずしも明確ではなく、さらに織工の蜂起についてのマルクスの「革命的見解」と、これに「ひとしい」とされるハイネの織工詩の内容との比較検討が、とくに「神」・「王」・「祖国」に向けられた「三重の呪い」に関して、不十分と私は考えるが、ここでは立ち入らない<sup>227</sup>。しかしいずれにせよ私は井上の論述の全体としての論旨に反対しているわけではなく、かえって井上の主張の通りだろうと、基本的には納得しているのであるが、戦後「日本のハイネ研究者の中」で「きわめて実証主義的な木庭宏」<sup>237</sup>は微妙な言い方で、〈ハイネとマルクス〉問題についての井上の論法を批判している——「ハイネ思想の尖鋭さ、マルクスとの近似性、プロレタリアートの役割に対する彼の的確な予言・期待等」にこそ「アクセントは……置かれるべきだとしても、しかし彼が他方で、生涯にわたり彼ら〔プロレタリアート〕に距離を保ち続けてきたこともまた事実で、それを塗抹する必要は毫もないのである。」<sup>247</sup>

木庭は、『貧しき織工』<sup>257</sup>第1連第2行中の「die Zähne fletschen とは、狂暴な怒りに駆られ歯をむき出し相手を威嚇する様をい」うにもかかわらず、井上はこの句に「歯を食いしばる」という「無難な、しかし原詩からは掛け離れた訳語を施し」、他方「後の詩では、『貧しき織工』とはちがって、第一節三行目以下に引用符が付され、織工たちの言が明白にせりふ化されている」にもかかわらず、その「訳においてもせりふから引用符を外してしまっている」と指摘して、「織工たちの言」の「せりふ化」について、「詩人の織工への憑依の度合はかなり稀薄化しているように見える」と断じ<sup>267</sup>、「織工の語る内容は頗るハイネ的であって、彼は、一般に前提とされているほど無条件に織工に感情移入していないのでないだろうか」<sup>277</sup>と疑問を呈し、「ここには多分プロレタリアートを理想化せんとする、マルクス主義者一流の傾向が現われているのだらう」<sup>287</sup>と皮肉な推測を述べている。私もこうした「傾向」があるだろうことを疑うものではないが、しかし木庭の批判の仕方とその内容には、「総括と展望」を目指す論文の本姓からして無理からぬこととしても、不備を感じないわけにはいかない。

訳語と引用符の有無の問題が、単にそれだけのことでなく、論者乃至訳者の一定の立場に根差

すものだという意味と範囲においてなら、私も木庭の批判にむしろ全面的に賛成である。しかし木庭は例えば（マルクス主義・主義者に対する覆いかくししようもないその一定の立場のことは指くとして）、いわばささいな事実誤認から出発してささいならざる結論を導いてしまっている。つまり『貧しき織工』の原テキストが第1連第3行冒頭および第2—4連各冒頭にハイネ自身による引用符を有しているのに対して、「後の詩」（『シュレージエンの織工』）の原テキストはそれを欠いており、したがって井上は、初稿の訳詩において本来あるべき引用符を省略し、本来ないはずのそれを決定稿の訳詩に添加したというのが、前提としての事実であって、木庭は否応なく推論の組み替えをせざるをえまい<sup>29)</sup>。訳語の問題にしても辞書的次元の議論をあまり出していない<sup>30)</sup>ばかりか、時事詩の訳としては同様に重大な部分（後述）については一切触れていない。

さらに木庭は井上賞讃に際しても、批判の際と同様の不備を示している。「井上はこの二者〔ハイネの織工詩と、織工の蜂起についてのルーゲの論説に対するマルクスの『批判的傍注』〕を対照し、さらに同一テーマを扱うフライリヒラートの詩やA.ルーゲの見解をも参照しつつ、両者の思想的親近性を証明し、ハイネのこの時事詩がマルクスから影響を受けていると見て差し支えないと結論し、かくて『貧しき織工』に一つの優れた解釈を与えるのである。この井上の試みは、日本の研究史上に残る、マルクス主義的研究の優れた業績として評価したい。一つの詩が、その成立の場に連れ返され、その場のコンテクストに立って解釈されているわけであり、実際このようにして初めて……ハイネの思想的位置が、そして文学的才能が、疑念の余地なきものとして確かめられてくるからである。」<sup>31)</sup>論文の性質上やはり仕方のないことだとしても、木庭は（そして井上自身も）、例えば上の評言の最後のパッセージとはウラハラに、織工詩の初稿と決定稿における異同を内容にわたって比較分析することもしなければ<sup>32)</sup>、マルクスが（そして間違いなくハイネも）読んだと思われる、ヴィルヘルム・ヴォルフ（あるいはアレクサンダー・シュネーア）による、蜂起直前の織工たちの惨状と蜂起そのものについての報告<sup>33)</sup>との比較検討もしないからである。

しかし今ここで直接このことに立ち入ることはしないで、木庭が見落していると私が上で述べた訳語の問題を、後に、何ヶ所かあるうちのとくに1ヶ所を選んで論ずる過程で、そしてその論述の範囲内で言及するにとどめたい。その箇所とは、前もっていえば、『シュレージエンの織工』第2連第2行 „In Winterskälte und Hungersnöthen;“ である。因みにその他の箇所は、例えば初稿・決定稿に共通するリフレイン „Wir weben! Wir weben!“、決定稿最終連第1行の „... , der Webstuhl kracht,“ である。

## 2.

『シュレージエンの織工』は、1844年7月10日付の《フォーアヴェルツ！》誌55号に『貧しき織工』の表題の下に発表された各連5行全4連からなるテキストの改稿として、ヘルマン・ピュットマン編集のアンソロジー『アルバム』に、1847年「(作者により校訂)」と添え書されて集録された、各連5行全5連のテキストである。初稿成立の時期は1844年6月とされている（これは

無論同年6月5日付のハイネのユーリウス・カムベ宛手紙の文言に基づいての判断だろう)。決定稿についても詩人自身が、1846年1月7日付のカール・グリーン宛手紙で報告しており、同じグリーン宛の同月末の手紙には『アルバム』に収載されるべき7篇の詩の原稿が同封されて、そのうちの1篇が『シュレージエンの織工』だった<sup>34)</sup>。

ところでエンゲルスは、1844年11月9日頃に執筆し、ロンドンの新聞《ニュー・モラル・ワールド》紙の12月13日付25号に寄せた記事『ドイツにおける共産主義の急速な進歩』の中で、「有名なシュレージエンの織工の歌の作者」について、「現存するドイツのあらゆる詩人のなかで、もっとも偉大な詩人」ハイネが「われわれの戦列に加わった」と紹介し<sup>35)</sup>、この詩のエンゲルス自身による英訳を提供している<sup>36)</sup>。この英詩の原詩が5連からなる決定稿ではなくして、「フォーアヴェルツ！」に載った4連の初稿であることは、井上の主張する通りである<sup>37)</sup>。原テキストが各連5行であるのに対して、英訳は第1連のみ6行からなり、その第3行 “We have suffered and hunger'd long enough;” は新たな附加であり、さらに第4連第2・3行、とくに第3行が “Where we suffered hunger and misery —” と改められている。この附加と訂正は、決定稿第2連のとくに第2行の内容へのテキスト上での接近を示している。因みに井上は（木庭も）この点には言及していない。この附加と訂正を英訳に際しての訳者自身に由来するそれと解きないとすれば、1844年8月末に数日バリーに滞在してマルクスと親交を結んだエンゲルスが、この附加と訂正をすでに含んでいるドイツ語原稿（もしくはそのコピー）に接する機会があったと推測するか、あるいは少なくともこの方向への改稿の示唆をハイネからマルクスを介して、またはマルクスからうける機会があったと推測せざるをえない。

決定稿の原稿は保存されていないが、初稿については、かなりの箇所にもわたる抹消と訂正を含む原稿が残っている<sup>38)</sup>。この原稿<sup>39)</sup>からまず表題が „Die schlesischen Weber“ から „Die armen Weber“ に変更されていることが分り、さらに抹消と訂正が第4連に集中していて、この部分でのハイネのいわば苦吟が感じられる。表題変更の理由は俄かに推測することができないが、しかしこの詩の発表時期前後の（とくに発表前の）新聞紙上の、シュレージエン地方の織物労働者の困窮状態を報告している記事を見ると<sup>40)</sup>、„Die armen Weber“ イコール „Die schlesischen Weber“ というのが当時の常識的なうけとり方だったと推測できる、とだけ述べておく。

織工詩のテキストの個々の異同については、小論冒頭および注<sup>25)</sup>に引用した原テキストを比較の上、井上論文41—43頁を参照してほしい。ここでは、私が最も重大な改変と考えている決定稿第2連第2行についてヴァルター・ヴェナーがボード・レッケの所説を援用して、このような改稿は「最も基礎的な欲求、熱と食糧への衝動が充たされえないような、まぎれもない欠乏状況」を呼び出していると述べている<sup>41)</sup>ことだけ、紹介しておく。そして、『シュレージエンの織工』自体の分析についてもすでに詳細な研究があるので、立ち入らない<sup>42)</sup>。

織工詩は初稿も決定稿もその第1連第3行以下が、織工たちのコーラスを形成している。つまり第1連の最初の2行が叙事者としての詩人の立場から、„Sie sitzen...und fletschen...“ と物語ら

れているのに対して、コーラスの部分は「Wir」のパースペクティブからの自己表白であり、さらに決定稿最終連は、明確に区別されることなく再び叙事の立場から物語られる第1行で始めて、第2行で再び「Wir」の視角へ戻り、しかも内容的に第1連へも戻る形になっている。第2—4連は、各々「Ein Fluch (dem Gotte...)」「Ein Fluch (dem König...)」「Ein Fluch (dem falschen Vaterlande)」で始められる織工たちの意志の表明であって、それは第1連第3・4行の「Altdeutschland」への「den dreifachen Fluch」を解き明している。初稿では第1連第3行「Altdeutschland, wir weben dein Leichentuch,」がそのまま最終連第4行に帰ってくるのに対して、決定稿の第1連第3行は「Deutschland」で始まり、最終連第3行で「Altdeutschland」へと書きかえられ、「三重の呪い」の目標の総称がより厳密に規定される。この点を除いて、決定稿第1連第3—5行と最終連第3—5行は一致している、すなわち織工のコーラス内部での枠をなしている<sup>43)</sup>。

ところでハンス・カオフマンはハイネの織工詩を、文学的伝統との関連に立ち入って論じて、「織る」ことと「運命」との神話的・象徴的結びつきをギリシヤ神話・旧約聖書そしてとくにヘルダーによって紹介された北欧神話の女神たちにおいて確認した上で、ハイネはこの「太古からのメタファー」をたんに受けついただけでなく、それを眼の前の素材を手掛りとして、「運命」を形成し配分する力を「神々」から「人間」へ・「天上」から「地上」へと奪取する方向で、完全に解釈しなおした、と分析し、そしてそれゆえにこそギリシヤ悲劇のコロノスならぬ織工詩における労働者たちのコーラスなのだ、と説明している<sup>44)</sup>。

「三重の呪い」をめぐる織工たちのコーラスと関連して、1831年11月21日リヨンにおいて蜂起した絹織工たちの闘争歌に触れないではすまないが、ここでは、カオフマンがハイネの織工詩とのかかわりを指摘して、リヨンの闘争歌にすでに「織工たちのコーラス、リフレイン、神の権力とこの世の権力との関連、革命的威嚇」が、それどころか「〈古い世界の経帷子〉」もあると書いていることを、紹介するにとどめる<sup>45)</sup>。

初稿第2連にゲーテの頌詩『プロメーテイスの歌』第3連との対応を指摘し、かつ両者の根本的相違を明らかにしたのも同じくカオフマンだった<sup>46)</sup>。しかし、この連についてゲーテとの対応を云々することができるならば当然指摘されてもいいマルクスとの照応については、汲みつくされているとは思われない。カオフマンは、織工蜂起の際の闘争歌『血の裁き』における織工たちの自覚と、ハイネ詩における織工たちのそれを比較して、ハイネが「啓蒙主義の宗教批判」を「同時代のもっとも進んだ社会主義的諸理念および革命表象」と結びつけたのに対して、『血の裁き』の織工たちはなるほど「資本家たち」との「直接的対立」は自覚しているけれども、「しかしかれらは、よりよき彼岸へのその信仰によって、ただこの世の〈嘆きの谷〉を〈光輪〉をもって神聖化しているにすぎないこと……」を認識することができなかつた、と評しているのみである<sup>47)</sup>。ここで指示されているのは、1843年末から44年1月にかけて執筆され、44年2月末の《独仏年誌》第1・2合併号に収められたマルクスの『ヘーゲル法哲学批判・序説』であって<sup>48)</sup>、例えば

その冒頭から2番目の、「迷妄の天上的〈祭壇とかまどのための祈り〉」が論駁された後の現状分析として、「天上という空想上の現実を超・人間をさがし求めて、ただ自分自身の反映しか見出すことのなかった人間」は、「自分の真の現実」をさがし求めるところにただ「自分自身の仮象」・「非・人間」しか見出しえないことに、すでに嫌気がさしていると述べているパラグラフ<sup>49)</sup>、さらに、「民衆の妄想でしかない幸福としての宗教の廃棄」を「民衆の現実の幸福の請求」と、「宗教の批判」を「宗教を光輪とするこの噴きの谷の批判」と言い切る、カオフマンの引用した語を含むパラグラフ<sup>50)</sup>、あるいはまた「真理の彼岸」が消失してしまった後の「歴史の課題」を「此岸の真理」の創立にみているパラグラフ<sup>51)</sup>、そしてさらには、1844年9月から11月にかけて書かれたエンゲルスとの共著『聖家族』(45年2月刊行)の、「リアルな人間主義」のドイツにおけるもっとも危険な敵として「唯心論」あるいは「思弁的観念論」を名差している序文冒頭のページ<sup>52)</sup>、あるいは1845年春にノットされたいわゆる『フォイアーバハに関するテーゼ』の第4・第6テーゼ<sup>53)</sup>は、それら自体として紛れもなく必然的連関を有していることはもとより、『貧しき織工』第2連と比較するならば、ハイネの織工たちの自己反省とかれらの新たな自覚(の方向)を、そして織工たちの呪いの向けられる「神」・「王」・「祖国」という悪しき三位一体の構造を、明快に注解してくれるようにみえる。

しかし、このような大きな連関に位置づけることができると考えうる『貧しき織工』第2連が、何故最終的には改稿されて、この連関から外されてしまったのか？ この当然ありうべき疑問に対しては、「織る」というメタファーをハイネが解釈しなおした際の、「運命」の形成と配分の力を「神々」から「人間」へ、「自分の状況を自覚するに至るプロレタリア」<sup>54)</sup>へと奪取するという方向性によって、すでに答えられていると考える。何故なら、この解釈しなおし自体がすでに上に引用・指示した文言におけるマルクスの要請の方向に十分見合っているからである。

ところで、ヴォルフによって「いわば貧窮者のマルセイエーズ」<sup>55)</sup>と評された『血の裁き』についても説明しなければ、片手落であろう。ヴェーナーはハイネ詩とこの闘争歌との関係について「直接の結びつき」はないと明快に述べている<sup>56)</sup>が、カオフマンはもう少し微妙で、ハイネの織工詩と同じ時期に自分の限の前にあったこの歌謡のテキストをマルクスが、「親交を結んだ詩人」に知らせないでおいたとはほとんど仮定できない、としている<sup>57)</sup>。各連4行全25連からなる『血の裁き』<sup>58)</sup>は、織工の蜂起に先立って、また蜂起の際に実際に歌われたものである。第1・2連が導入部で、つづいて「貧者の持てる一切合財を喰う」(第4連第3行)ことによって金持となった工場主たちの贅沢と飽食を対比の前提として(第6連第3・4行)、「貧しい人々」(第6連第1行)の貧窮と飢餓を描き出し(第5・6・10連)、織工たちは「ここの貧者たちを圧迫している／一切の困窮の源泉」として「お前たち」を名差し(第5連第1・2行)、かれらとその「使用人たち」(第3連第2行)による苛斂誅求(第7連)を、とりわけ労賃切り下げの手練手管(第15連)を、また「貧しい織工」に対するかれらの非人間的な傲慢(第8・9連)を断罪し、「呪いがお前たちの報いとなるぞ！」(第4連第4行)と威嚇し、この世では不可能でもあの世でこの

悪人たちが神の裁きをうけることを求めている（第13連）。

マルクスはこの闘争歌について、「まず織工の歌を思いうかべるがいい。この大胆な闘争の合言葉のなかには、かまどや仕事場や居地区のことは一度も述べられず、プロレタリアートはいきなり私有財産制社会にたいするかれらの敵対を、あからさまに鋭く力づくよく絶叫している。シュレーゲンの暴動は、フランスやイギリスの労働者の蜂起の終わった地点から、すなわちプロレタリアートの本質についての自覚から始まっているのである」<sup>60)</sup>と評している。この評言が織工たちの「プロレタリアートの本質についての自覚」を賞讃するのみで、カオフマンの場合には指摘されていたプロレタリアートとしての未成熟には一切触れていないのは、上の引用にすぐ続けて、「行動そのものがそういった卓越した性格を帯びている。たんに労働者の競争相手である機械が破壊されたばかりではなく、所有権の証書である取引帳簿までもが破棄された。そして他のあらゆる運動が、まず工場主という目にみえる敵に立ちむかったのに、この運動は、同時に銀行家というかくれた敵に立ちむかっている。結局のところ、どんなイギリスの労働者の蜂起も、どれひとつとしてこれと同じような勇敢さ、熟慮、辛棒づよさをもって行なわれたことはなかった」<sup>60)</sup>と述べている場合のいわば政治的配慮と同じ性質のものであろう。科学的な共産主義理論の構築ばかりではなく、この理論による労働運動のとくにドイツにおける形成と指導をも志していたマルクス<sup>61)</sup>にとって、この努力に当面不都合な点をいわば度外視して、逆に有益で促進的な点をきわだたせることは、理にかなっていたはずである。マルクスによって無視されたような事柄をヴォルフなどの報告がいくつも含んでいる（後述）からといって、それだけでマルクスのこの評言を誤謬・不誠実扱いすることも、逆にマルクスの評言だからというだけで絶対視することも、共にふさわしくないことである<sup>62)</sup>。それはとにかく、この問題については後に改めて考える。

ヴォルフガング・シュタイニツの紹介している「無数の異稿」だけからしても、この闘争歌が「貧窮化した織工大衆の心をつかみ、民謡となった」ことを証明してい<sup>63)</sup>ようが、これを改めてハイネの織工詩と比較してみると、つぎの点に気づく。織工たちの困窮と悲惨の原因が、前者においては工場主である「旦那方」（とその「使用人たち」）とその強欲な利潤追求のやり口に求められ、かれらに対する「呪い」の実現が神による最後の裁きに委ねられているのに対して、後者においては「神」・「王」・「祖国」の悪しき三位一体、「古いドイツ」に求められ、しかも神による最終審の観念とは全く無縁に、かえって最後の裁きは織工たち自身によって与えられることになる、というように構想されている。このことに見合って織工たちは、ハイネの場合には「Wir」のパスpekティヴから直接「Wir」をもって「呪い」を発しているのに対して、『血の裁き』では、なるほど織工たちの「Wir」に対峙する「Ihr」としての企業家たちにむかって「Ihr」の悪業が指弾されるにしても（第4—7・9・11—13・15・20・22連）、「ツヴァンツィガの旦那方」（第3連）以外に名差される「フェルマン」（第16連）、「ホーフエリヒター兄弟商会」（第17連）、「カムロット氏」（第19連）については3人称によって物語られ、第14連においては前連の「Ihr」が「神」も「地獄」も「天国」も信じない3人称複数の「Sie」として叙述されており、さらに工場主た



ちの „Ihr“ に対峙しているはずの織工たちの „Wir“ は一切表面に現われず3人称をもって描出されて、第17・23連にかろうじて、織工たちの „Wir“ とは完全に一体ではありえないこの歌の作者とみられる „Ich“<sup>64)</sup>が顔を出すばかりである。このことも、ハイネの場合には織工たちの連帯が前提されていると考えるのに対して、『血の裁き』の織工たちは、生活の貧窮と工場主たちに対する怒りと憎しみと呪いは共有していても、かれらが「プロレタリアートの本質についての自覚」に関して未成熟であることを傍証しているかもしれない。

両作品の比較に際してもうひとつ重要な側面としてカオフマンは、『血の裁き』が「現実のプロレタリアの生活のリアルな描写」について、ハイネ詩より「比較にならぬほど豊か」な点を挙げている<sup>65)</sup>。ハイネの織工詩も、„Sie“ の視角からする詩人の叙事の部分においては織工の現実の仕事が具体的に描出されているといえようが、しかし織工たちの „Wir“ によって支配されている部分にみとれるのは、「個別的形姿化」ではなくして「世界観的な一般化」・「労働者階級の歴史的本質についての一般的表象」だ、というのである<sup>66)</sup>。すでに注<sup>34)</sup>で触れたように、織工詩第3連が、19世紀40年代にいたるプロイセン史とのかかわりにおける現実の織工蜂起の原因とその軍隊による鎮圧とに直接対応しているとみることができるとしても、そこに『血の裁き』にある具体的な現実との密着が欠けていることは、明白だろう。

このようにみえてくると、カオフマンのいうようにマルクスを介してハイネが織工詩執筆の時期にこの闘争歌のテキストに接する機会があったろうと仮定することはできても、ヴェーナーのいうように、両者の間には「直接の結びつき」はなかったとする方が穏当だろう。(つづく)

(小論は本来このあと、織工詩の〈時代〉の主要部分をなすであろうシュレージエンの織工の蜂起そのものにかかわり、その議論の中で決定稿第2連第2行を問題とし、かつこの脈絡の中で〈ハイネとマルクス〉の関係についても論及し、最後にハイネの時事詩群の中で「特異な地位」を占めているとされる<sup>67)</sup>織工詩の〈時代〉と詩人の「抒情主体」<sup>68)</sup>との関係にまで迫ることができれば、と考えていたのだが、紙数が尽きた。この分は小論(2)で扱うことにしたい。)

#### 出典と注釈

- 1) 小論は、1985年6月25日早大文学部で開かれた早稲田ドイツ文学会第45回研究発表会での発表「ハイネの時事詩『シュレージエンの織工』の井上正蔵訳について」の原稿を、大巾に加筆修正したものである。
- 2) Heinrich Heine. Säkularausgabe. Werke · Briefe · Lebenszeugnisse. Hrsg. von den NFG der klassischen deutschen Literatur in Weimar und dem CNRS in Paris. Bd. 2: Gedichte 1827-1844 und Versepen. Bearbeitet von Irmgard Möller und Hans Böhm. Berlin/Paris 1979. S. 137f.
- 3) 井上正蔵訳『ハイネ全詩集V・最後の詩集』(角川書店、昭和48年)、364—365頁。なお、注<sup>12)</sup>の井上論文初出の1966年に初版が出た井上訳『ハイネ詩集』(白鳳社)所収(163—164頁)の訳稿は、表記上漢字・平仮名のちがいはあっても、引用した訳稿と基本的に同じである。白鳳社版では引用符が第1連第3行冒頭、第2—5連各冒頭に付されている点だけがちがっている。
- 4) 例えば Hans Kaufmann, Heinrich Heine: „Die schlesischen Weber.“ In: Hans Kaufmann,

Analyse, Argumente, Anregungen. Aufsätze zur deutschen Literatur. Berlin 1973. S. 12.あるいは Werner Vortriede, Heine-Kommentar. Bd. 1: Kommentar zu den Dichtungen. München 1970. S. 92.

- 5) 1844年6月初め、プロイセン王国シュレージエン州のオイレンゲビルゲ山麓の隣りあった二つの村、人口合せて18,000人のベータースヴァルダオとランゲンビーラオで、木綿織工と紡ぎ工が工場主たちにむかって実力行使をもって立ちあがった。6月4日、まずベータースヴァルダオの数百人の労働者が、自分たちがもっとも憎むツヴァンツィガー兄弟商會に殺到し、賃上げを、そしていわば寸志を要求した。嘲笑と悪罵をもってそれを拒否されたかれらは建物に侵入し、ありとあらゆるものを、家具調度什器・装飾品・建具・飾り金具・階段・壁・窓枠などを破壊し、帳簿・手形・書類をひき裂いた。投石によってガラスの壊された窓から投げ出されたストックされていた布地類は、裂かれ千切られ踏みにじられ、あるいは周囲の人々に分配された。翌5日、手斧・干草用熊手・棍棒・石塊などで武装した労働者たちは(ランゲンビーラオその他から合流した者を含めてすでに3,000人を超えていた)、やがて隣村へ移動し、ディーリヒ兄弟商會を攻撃の対象としたが、シュヴァイトニツから治安出動した歩兵2箇中隊と対峙した。解散命令にも従わず威嚇発砲にもひるまぬ蜂起者たちは、2度の斉射によって11人の死者と20数名の重傷者を出したが、このことにかえって激昂して反撃に出、出動部隊を退却させた。翌6日、砲兵と騎兵の増援をうけた部隊によって、蜂起は鎮圧された。100人を超える織工たちが逮捕拘禁され、早々と8月31日にはプレスラオのプロイセン王国高等裁判所において、80人を超える労働者に総計203年の懲役刑・90年の要塞禁固刑・350回の鞭打刑の判決が下された。
- 6) Peter Hasubek, Heinrich Heines Zeitgedichte. In: Zeitschrift für Deutsche Philologie. Bd. 91. Sonderheft: Heine und seine Zeit. Berlin/Bielefeld/München 1972. S. 25f.
- 7) 例えば Leo Kreuzer, Heine und der Kommunismus. Göttingen 1970. S. 32ff.
- 8) 木庭宏『日本の戦後ハイネ研究——総括と展望』(神戸大学教養部ドイツ語教室「ドイツ文学論集」1976年第5号所収), 135頁。
- 9) 同上, 127頁。
- 10) 舟木重信『詩人ハイネ・生活と作品』(筑摩書房, 昭和40年), 383—419頁。
- 11) 木庭, 120頁。
- 12) 井上正蔵『ハイネ序説』(未來社, 1967年所収。初出は1966年), 20—62頁。
- 13) 木庭, 135頁。
- 14) 井上, 31頁。
- 15) 同上, 59—60頁。
- 16) 同上, 48頁。
- 17) 同上, 43頁。
- 18) 同上, 48頁。
- 19) 同上, 52頁。
- 20) 同上, 56頁。
- 21) 同上, 52頁。
- 22) ただし第1点については Kreuzer, S. 28-35. と Walter Wehner, Weberaufstände und Weberelend in der deutschen Lyrik des 19. Jahrhunderts. München 1981. S. 148-153. を、第2点については Kaufmann, S. 14-16. を、「不十分」の根拠の手がかりとして指示しておく。
- 23) 「木庭宏『ハイネとユダヤの問題——実証主義的研究——』ほか」をめぐって書かれた、山下肇『ユダヤ人ハイネ、マルクス』(《朝日ジャーナル》1981年10月23日号所収), 67頁。
- 24) 木庭, 138頁。
- 25) DIE ARMEN WEBER. // Im düstern Auge keine Thräne, / Sie sitzen am Webstuhl und fletschen die Zähne: / „Altdeutschland, wir weben dein Leichentuch, / Wir weben hinein den dreifachen Fluch! / Wir weben! Wir weben! // „Ein Fluch dem Gotte, dem blinden, dem tauben, / Zu dem wir gebetet mit kindlichem Glauben; / Wir haben vergebens gehofft und geharrt. / Er hat uns geäfft und gefoppt und genarrt, / Wir weben! Wir weben! // „Ein Fluch dem König, dem König' der Reichen, / Den unser Elend nicht konnte erweichen, / Der uns den letzten Groschen erpreßt, /

Und uns wie Hunde erschießen läßt! / Wir weben! Wir weben! // „Ein Fluch dem falschen Vaterlande, / Wo nur gedeihen Lüg' und Schande, / Wo nur Verwesung und Todtengeruch — / Altdeutschland, wir weben dein Leichentuch! / Wir weben! Wir weben! (Heinrich Heine. Säkularausgabe. A. a. O. S. 137.)

「貧しき織工」／くらい眼に涙も見せず／織機にすわって歯を食いしばる／古きドイツよ お前の経帷子を織ってやる／三重の呪いを織りこんで——／織ってやる 織ってやる！／ひとつの呪いは神にやる 無邪気な信仰で祈ったのに／盲でつんぼの神にやる／たのめど待てど無慈悲にも／さんざからかいなぶりものにしやがった——／織ってやる 織ってやる！／ひとつの呪いは王にやる 金持ちどもの王にやる／俺たちの不幸に目もくれず／残りの銭までしぼり取り／犬ころのように射ち殺しやがる——／織ってやる 織ってやる！／ひとつの呪いは いつわりの祖国にやる／はびこるものは 虚偽と恥辱ばかり／腐敗と死臭がただようばかり——／古いドイツよ お前の経帷子を織ってやる／織ってやる！ 織ってやる！（井上、38—39頁。）

26) 木庭, 138頁.

27) 同上, 137頁.

28) 同上, 138頁

29) 引用符の有無がテキストの解釈と評価の点で重要な意味をもっていることは事実で、その傍証として、『貧しき織工』のピラにおける無名氏による部分的改作の例を二つ報告しておく。1例は、Lutz Kroneberg / Rolf Schloesser, Weber-Revolt 1844. Der schlesische Weberaufstand im Spiegel der zeitgenössischen Publizistik und Literatur. Köln 1979. S. 485. に採録されている4連の „Weber-Lied“ で、ここでは原テキストの第1連における叙事的3人称 „Sie“ が „Wir“ に改められた上、原テキストの引用符がすべて省略されて、詩人による引用・代弁としてではなく、全体が織工たち自身の直接の意志表明として作用する結果となっている。もう1例は、Walter Wehner, Heinrich Heine: „Die schlesischen Weber“ und andere Texte zum Weberelend. München 1980. (以下、Wehner と略す。) S. 81f. に収載されている4連の „Die schlesischen Weber“ で、ここでは前例とは逆に、第1連第3・5行の原テキストでは „Wir“ となっている部分が „Sie“ に、第4行の „Wir“ が „Und“ に改められた上、第2連以下の原テキストの引用符が外されて、織工たち自身の表白として、第1連の叙事と明確に対比されている。木庭にならっていえば、引用符付きの『貧しき織工』におけるハイネの「織工への憑依の度合」の「稀薄」を嫌ってのこと、ということになるのだろうか。

30) 木庭同様、私も井上の訳語「歯を食いしばる」に否定的である。この日本語の表現が「くやしきや怒り、または苦痛などを必死にこらえる」(小学館『日本語大辞典』) きまを表現するのに対して、ドイツ語の „die Zähne fletschen“ は „die Zähne aus Verachtung oder Zorn entblößen“ (J. H. Campe, Wörterbuch der Deutschen Sprache) を意味する以上、訳語と原語のくいちがいは、常識的には明白にすぎるように思われる。意味の眼目が、日本語ではまさに「こらえる」ことにあるのに対して、ドイツ語ではかえって攻撃的に表に現わすことにあり、「こらえ」あるいは現わす対象も、後者の方がより能動的なものだからである。だから、井上がこの詩の内容に「マルクスの革命的見解にひとしい」ものの「脈々」たる「生動」をみてとっている以上、この訳語は井上の解釈と評価の方向に抵触することになる。

31) 木庭, 136—137頁.

32) 井上は、41—43頁において、詩句の表現上の異同について述べ、「くらべてみると、のちの決定稿のほうが、たしかに詩語そのものが、よりいっそう効果的に選択され、より迫力のあるものに具体化されていることがわかる」(42頁) と判定しているだけである。

33) 『シュレーゲンにおける悲惨と暴動』についてのヴォルフの報告は、1844年12月にダルムシュタットで出版された H. ピュットマン編《ドイツ市民年鑑1845年版》に載ったものだが、報告文の終りには「プレスラオ、6月末」と記されている。ハイネの『貧しき織工』が1844年7月10日付の《フォアヴェルツ!》誌55号に印刷され、A. ルーゲの『プロイセン国王と社会改革』が同誌60号(7月27日)に出、この論説に対するマルクスの『批判的傍注』がやはり同誌63号(8月7日)・64号(8月10日)に連載されていること、マルクスがこの『批判的傍注』でとりあげている「織工の歌」がヴォルフの報告の末尾に採録されている『血の裁き』のことであること、同じ《フォアヴェルツ!》95号(11月27日)にヴォルフ

の手に帰せられている (Weber-Revolt 1844. S. 593.) 蜂起者に対する裁判の判決を報じ論難している記事『鞭打24回と要塞労働10年』が載っていること、そしてそもそもヴォルフが同誌のためにプレスラオから通信を送っていたこと (Weber-Revolt 1844. S. 579.) などが、「読んだ」と考える上での前提である。シュネーアの『シュレージエンの亜麻布労働者の困窮とそれを除去する手段について』は1844年に出版されて、センセーションをまき起した (Weber-Revolt 1844. S. 589.)。ヴォルフの報告が社会主義的立場に立って、マルクス同様、社会の再組織・改造を訴えることによって終わっているのに対して、シュネーアのそれは、ルーゲ同様、行政上の措置や市民のキリスト教的慈善によって労働者をその貧窮状態から救済することを提案するブルジョアの立場によっている。

- 34) Wehner, S. 31ff. ヴェナーは初稿成立の時期について、上記カムベ宛の手紙を引用して („Dem hiesigen Journal Vorwärts! habe ich noch einige andre Gedichte gegeben, die ich Ihnen mittheilen werde sobald sie abgedruckt, Ihrem eignen Ermessen überlassend ob sie für mein Buch nicht zu grell.“ In: Heinrich Heine. Säkularausgabe. Bd. 22: Briefe 1842-1849. Bearbeitet von Fritz H. Eisner. Berlin/Paris 1972. S. 109.), そしてカムベは『貧しき織工』を『新詩集』に採用しなかった、と述べている (S. 32 f. u.47.). 事実1844年9月にハムブルクのホフマン・ウント・カムベ書店から出版されたハイネ『新詩集』(の、24篇からなる時事詩の項)にはこの詩は含まれていない。しかしそれと明確に名差されていない „einige andre Gedichte“ のうちひとつが事実『貧しき織工』だったのかどうかは、特定できない。ヴェナーの判断が正しいとすれば、このことは織工詩の解釈にとって重大な意味をもつことになり。何故なら、その場合カムベ宛手紙の日付の時点までに『貧しき織工』は出来上っていることになり、蜂起の日付が6月4-6日であること、蜂起の報道が直後にプロイセン校閲当局によって敢重に規制されたこと (Wilhelm Wolff, Das Elend und der Aufruhr in Schlesien. In: Gesammelte Schriften von Wilhelm Wolff. Nebst einer Biographie Wolffs von Friedrich Engels. Mit Einleitung und Anmerkungen, hrsg. von Fr. Mehring. Berlin 1909. S. 56.), 蜂起の第1報が1844年6月7日付の「政府に忠実な」《シュレージエン特許新聞》の絞切型の記事だったこと (Weber-Revolt 1844. S. 59. u. 147.) を考慮すると、例えば「この事件のニュースがパリに到着するとまもなく、ハイネは感動をうけて、いちはやく筆をとった」と考える井上 (38頁) の、あるいは „es [das Gedicht] ist ohne diesen Anlaß nicht denkbar, obwohl es den Aufstand selbst ja nicht darstellt, sondern nur die Aufständischen.“ とみなすカオフマン (S. 12) の主張は修正を余儀なくされるだろう。そればかりか、詩に登場する織工たちの立つ時点が蜂起前か後かという、解釈と評価に深刻に影響する問題が生ずることになる。ただし第3連第2-4行が蜂起の原因と結果を反映していると考えうるとすれば、問題はますます複雑になり。

35) 井上, 50頁.

- 36) Without a tear in their grim eyes, / They sit at the loom, the rage of despair in their faces; / “We have suffered and hunger’d long enough; / Old Germany, we are weaving a shroud for thee / And weaving it with a triple curse. / “We are weaving, weaving! // “The first curse to the God, the blind and deaf god, / Upon whom we relied, as children on their father; / In whom we hoped and trusted withal, / He has mocked us, he has cheated us nevertheless. / “We are weaving, weaving! // “The second curse for the King of the rich, / Whom our distress could not soften nor touch; / The King, who extorts the last penny from us, / And sends his soldiers, to shoot us like dogs. / “We are weaving, weaving! // “A curse to the false fatherland, / That has nothing for us but distress and shame, / Where we suffered hunger und misery — / We are weaving thy shroud, Old Germany! / We are weaving, weaving! (Friedrich Engels, Rascher Fortschritt des Kommunismus in Deutschland [I]. In: Marx/ Engels, Werke (MEW). Bd. 2. Berlin 1976. S. 513.)

- 37) 井上, 50頁, 62頁. 井上は38頁でも、「エンゲルスの英訳したのは『シュレージエンの織工』だとドイツの学者たちは知っているけれども、それは誤りであって『貧しき織工』に他ならない」と憤激しているが、例えば MEW. Bd. 2. 巻末の注 (S. 665.) でいわれていることは、それとウラハラに、「作者によって校訂された有名となった稿体」を「ここで」は提供するけれども、「エンゲルスの訳したのは……《フォーアヴェルツ!》で公けにされた……稿体である」ということであって (私の使った版は井上のそ

れより出版年次が新しいが、しかし1957年初版の „Unveränderter Nachdruck“ と奥付に明記されている)、 「ドイツの学者」カオフマンもすでに1959年に、エンゲルスの記事の引用に続けて、このことを保証している (Kaufmann, S. 13.)。ただし MEW. Bd. 2. S. 513. の写真版のキャプションは、井上のいう通り間違っている。

- 38) Wehner, S. 31.
- 39) Weber-Revolte 1844. のカバーの裏表紙にあたる部分に „Manuskript der Erstfassung“ として復刻されている。
- 40) 例えば, „den Notstand der armen Gebirgsbewohner“ (Weber-Revolte 1844. S. 69.), „den Not der armen Spinner“ (A. a. O. S. 72.), „Der arme Weber“ (A. a. O. S. 73.), „der Not der armen Weber im Gebirge“ (A. a. O. S. 78.), „der Not der armen Spinner und Weber im schlesischen Gebirge“ (A. a. O. S. 80.), „Ein armer Weber“ (A. a. O. S. 90.), „der Armen in schlesischen Gebirge“ (A. a. O. S. 92.), „den armen Webern und Spinnern in Schlesien“ (A. a. O. S. 102.), „die armen Schlesier“ (A. a. O. S. 104.), „des Notstandes der schlesischen Weber“ (A. a. O. S. 107.), „der Not der Spinner und Weber im schlesischen Gebirge“ (A. a. O. S. 109. u. 111.) など。
- 41) Wehner, S. 41. 因みにこの改稿全体の意味については、カオフマンの „mehr als bloß <artistische Rundung>“ という評語のみヒントとして記しておく。詳しくは Kaufmann, S. 23f. および Wehner. S. 40f. を見よ。
- 42) カオフマンの分析 (S. 23ff.) を踏まえてヴェーナーは、詩の形式上の組立てについて、シNTAX 上の語句および音韻上の語の選択についての分析によって、この詩の „einen recht hohen <Poetizitätsfaktor>“ を確認した上で、 „Trotz dieser Qualitäten der bewußt erarbeiteten Strukturen erweckt das Gedicht nicht den Eindruck des Künstlichen.“ と述べ、その理由を一方では „Nähe zur volkstümlichen Ballade“ に、他方では „Rhythmus der Arbeit“ としてのテキストのリズムに求めている (Wehner, S. 37ff. u. Wehner, Weberaufstände... S. 155ff.)。
- 43) この「三重の呪い」が、 „the battle-cry of the Prussians in 1813: — <With God for King and fatherland!>” であり、以来ずっと “a favourite saying of the loyal party” だったこのスローガンのパロディであることを指摘したのはエンゲルスだった (Engels, S. 513) が、カオフマンが「三重の呪い」とこのスローガンの三つの語についてかなり詳しく分析している (S. 13ff.) ので、詳細は今ほそれに譲る。ヴェーナーは、同時代の他の詩人・作家たちの仕事についても、この枠組を確認している (S. 35f.)
- 44) Kaufmann, S. 16ff.
- 45) この闘争歌のフランス語テキストとその独訳は、Kaufmann, S. 27f. および Wehner, S. 82. を見よ。ヴェーナーは、ハイネはこの歌を自身のテキストを刺戟し励ますものとして役立てたとしている (S. 82.)。カオフマンもいう通り、テキスト自体が両者の関係を十分裏付けている (Kaufmann, S. 27.)。
- 46) Kaufmann, S. 28ff.
- 47) A. a. O.
- 48) 《独仏年誌》の同じ号に、「マルクスの名前と分かちがたく結びつくハイネの最初の時事詩」(井上, 32頁)『ルートヴィヒ王讃歌』が載っているから、ハイネが『序説』を読んでもいず、マルクスとの間でこの文章について(その内容について)議論が全くなかったと考えることの方が、不合理である。
- 49) Karl Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung. In: MEW. Bd. 1. Berlin <sup>12</sup>1978. S. 378.
- 50) A. a. O. S. 379.
- 51) A. a. O.
- 52) Karl Marx/Friedrich Engels, Die heilige Familie oder Kritik der kritischen Kritik. Gegen Bruno Bauer und Konsorten. In: MEW. Bd. 2. Berlin <sup>9</sup>1976. S. 7.
- 53) Karl Marx, [Thesen über Feuerbach.] 1. ad Feuerbach. In: MEW. Bd. 3. Berlin <sup>9</sup>1978. S. 6.
- 54) Kaufmann, S. 19.
- 55) Wolff, S. 51.
- 56) Wehner S. 40.

- 57) Kaufmann, S. 20f.
- 58) „Lied der Weber in Peterswaldau und Langenbielau... Das Blutgericht.“ In: Wolff, S. 61ff. 他にもいくつかの文献に収録されている (例えば Wehner, S. 21ff. あるいは Weber-Revolte 1844. S. 469ff. など). 各々テキストに多少のズレがあるが, Alfred Zimmermann, Blüthe und Verfall des Leinengewerbes in Schlesien. Gewerbe- und Handelspolitik dreier Jahrhunderte. Breslau 1885. S. 351f. に載っているテキストでは, 第3連第2行の „Die Diener“ (「使用人たち」) が „Die Dierig“ (「ディ-リヒの連中」) と改められていて, 織工たちの「呪い」の相手が増員されている.
- 59) 井上, 36頁.
- 60) 同上.
- 61) Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der SED, Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Bd. 1: Von den Anfängen der deutschen Arbeiterbewegung bis zum Ausgang des 19. Jahrhunderts. Berlin 1966. S. 42-53. あるいは井上, 34頁.
- 62) ヴェナーは, マルクスのこの解釈がテキストの全連に適合することはないとあってよからうと述べ (S. 26.), さらにこの歌における織工たちの政治的・社会的自覚について, マルクスの評価と真向から対立するカール・ファルンハーゲン・フォン・エンゼの日記の記事 (1844年6月19日) を紹介している: „Lied aus Schlesien, ‚Die Klagen der Weber‘, ein ganz prosaisches Anklagen und Verwünschen der Fabrikherren, die den Arbeiter den Lohn abknappen, sie werden persönlich genannt und als Leuteschinder besungen. Von sozialistischen oder kommunistischen Einwirkungen keine Spur, alles nur platter Ausdruck der Noth und des Hungers.“ (S. 27.) 井上はこのような問題が伏在していることを全く意識して、いわば公式的見解を述べているだけである。「ドイツの労働運動史における最初の画期的事件の意義を第一に認識して、積極的に、歴史的・理論的にクローズアップさせたのは、マルクスに他ならない」(37頁). 公式的見解云々については、例えば Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Bd. 1. S. 49. を見よ.
- 63) Wolfgang Steinitz, Deutsche Volkslieder demokratischen Charakters aus sechs Jahrhunderten. Gekürzte Ausgabe in einem Band, hrsg. von Hermann Strohbach. Berlin 1978. S. 252. 「無数の異稿」そのものについては、同書のオリジナル版 (2巻本) の第1巻 (Berlin 1954), S. 230. 233-236. 242. を見よ.
- 64) 最終連第1・2行 „Wer traf dort wohl Hauslehrer an/Bei einem Fabrikanten?“ (Wolff, S. 63) の謎めいた „Hauslehrer“こそこの „Ich“ だろうか. この闘争歌の作者をこの連によって、織工たちのもとに住んでいた村の学校教師とする推測は、当局の度重なる探索にもかかわらず、証明されなかった (Wehner, S. 28.).
- 65) Kaufmann, S. 21.
- 66) A. a. O. S. 22.
- 67) A. a. O. S. 11. u. Hasubek, S. 40f.
- 68) 小論のもとになった口頭発表について、同室の林睦実氏がコメントした際の用語。〈時代〉と「抒情主体」の関係については、本来ならば、学位論文に „Poesie und Politik — Entwicklungsetappen und Zentralprobleme des politischen Gedichts im Schaffen Heinrich Heines bis 1848.“ を書いた同氏にこそ論じてほしいテーマであることを、最後に付記しておく。